
袂い屋本舗

鉋 仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

抜い屋本舗

【Nコード】

N5398Y

【作者名】

鮑 仁

【あらすじ】

自らの霊媒体質で人生が上手く行っていないと考える藤堂大介は、ある日、趣味のネットゲームのログイン画面で胡散臭い広告を見つける。そこには抜い屋本舗という胡散臭い企業の求人が載っていた。半ばやけくそでその企業に面接に行く事にした大介は、その際、あっさり採用される、晴れて有限会社抜い屋本舗の社員となった彼を待ち受けるものはなんだろう。

プロローグ（前書き）

世界観や設定がこの作品と被っている等の指摘がありましたらご一報ください。

プロローグ

俺という個人を表す記号、藤堂大介という男の特異な体質について他人に話す。そんな機械は未来永劫訪れないだろうと思っていたし、ましてやその特異な体質が多数数の会話で共通の話題になる可能性など考えもしなかった。

仕事を首になった俺が、失意のどん底で見つけたあの胡散臭い求人がなければ。

「藤堂君、君、明日から来なくていいから」

本日の仕事を終えて家に帰ろうと席を立ちかけた時、部長に言われたその台詞を、高校を卒業してからの三年で何度聞いたことだろう。とにかく俺は仕事と名の付くものは一通り出来ない。そんな自覚があるのは言うまでも無い。

今年に入って首になった会社は二社。恐らく神様に嫌われているのである。この俺はいらん才能ばかりを持っていて、まっとうな社

会人として生きて行く素質はからつきしだ。

そのいらん才能というのも幽霊や幽霊のようなものが見える程度のどうしようもないもので、日常生活で役に立つとは思えない。おまけに奴等、こっちが自分の事が見えていることを知ると寄ってくる、群がってくる、憑いてくる。メリットは皆無だ。

会社を首になった原因だって元はと言えばこの俺の体質が招いたことで、人一倍靈感の鋭い俺には多くの幽霊やその他の存在が寄ってくる。奴等は一度獲物を決めたら喰らい付いて話さない。こっちの事情なんざお構い無しで毎日毎日絡み付いてくる。

それを抜い退ける力もない俺は奴等のなすがままで仕事の効率は著しい低下を見せ、おまけに職場で起こる数々の超常現象。俺が居ないときは何も起こらないわけだから自然と超常現象と俺の存在は結び付けられるわけで、そんな噂が社内にもことしやかに囁かれ出した頃には俺はそろそろ首になると覚悟を決めなくてはならない。

俺は靈感が人より少し鋭い。それだけだ。なんで、こんな目に遭うのだろう。しかもこの体質、本当の意味で役立たずだ。

一度自分の特性をどうにか生かせないかと、シックスセンスを駆使したパチンコの台選びを敢行したが、そのとき得た物といえば俺に賭け事は向かないという残念な結論だった。

社会とは持たざるものには徹底的に冷たく出来ている。

地べたを這いずる事すら困難な自分の現状を嘆く暇も無く、俺は次の仕事を探す羽目になる。

しかしながら、そろそろ限界、そろそろいいんじゃないか、もう十分頑張ったと思うに至った俺は、自分の住まうアパートに帰るや否や、見苦しい逃避を見せる。

普段からの趣味だったネットゲームに没頭し、外に出ることすら拒み続け、気が付くと一ヶ月が経っていた。たった一ヶ月仕事をしなかっただけで、少なかった貯金はそこを突き、生まれて初めての家賃の滞納。渋々滞納を受け入れた大屋さんの汚物を見るかの様な目を目の当たりにした瞬間、何もかもが嫌になりもう死んでしまお

うかなどと考えながらここ数日ですっかりと習慣になってしまった
ネットゲームにログインしようとした時のことだった。

「何だこれ？」

気が付くとそんな呟きが自分の口から漏れていた。

ネットゲームのログイン画面の右上、そのあたりに胡散臭い広告
があつたのだ。

「自分は幽霊が見える。霊媒体質だ。幽霊にまわり憑かれて困つ
ている。そんな貴方に朗報。被い屋本舗でその体質を有効活用しま
せんか……。頑張り次第で年収二千万も可能？何だこりゃ」

普段なら気にも留めない胡散臭いだけのはずのその広告から、俺
は注意をそらすことは出来なかった。

この手の広告は見かけてもスルーが鉄則。だが此処でスルーして
俺はこれからどうする。一生自分の体質を恨みながら人生を終える
のか？生きながらにして周りの人間の成功を妬む悪霊みたいな人間
になるのか？もういい疲れた。そろそろ、自分の人生に幕を下ろし
てもいい頃だろ。本当に最後だ。九割九分なんかの詐欺だが、最後
に騙されてやるうじやないか。これで騙されて何もかも失って、そ
の上で死んでやるうじやないか。

それまで、ネットゲームのログインと書かれたアイコンに合った
ポインタをその胡散臭いサイトにあわせ手早くダブルクリックする。
思っていたよりも早く画面が切り替わった。切り替わったページ
を見た瞬間に俺の口から短い呻き声のようなものが漏れたのは、こ
のページの製作者の神経を疑いたくなるようなショッキングピンク
のがウインドウ一面に広がったからだ。

一面ピンクで何もかかれて居ないそのページを啞然と見ていると
数秒送れて、黄色の文字が浮かび上がってくる。どうでもいいが読
み難い。

面接地 東京都。。。区。。。町1-5。。。ビル15階

面接日、時間 貴方の都合で結構です。受付に本サイトを見た
伝えれば即面接に移らせていただきます。

それでは面接でお会いするのを楽しみにしております。

それだけが書かれていた。一体なんだってんだ。まあ、もとより
何も期待なんてしてないわけだし。こんなもんかな。

しかしどんなに胡散臭かろうと、最後の面接だ。面接日も面接時
間も俺の都合でいいみたいだし。明日あたり行ってみるか。

面接そして

面接当日、といつても具体的に何かを指定されたわけでもなく完全に俺の都合で来たわけだが、面接会場となるビルの前まで到達した俺は正直、面食らっていた。因みに今の俺には、歩道橋で見つけた頭から血を流す女が腕に組み付いている。

モテモテだな、俺。全く嬉しくねえ。

しかし今はそれどころではない。あんな胡散臭い求人だから何も期待せずやってきたというのに。

「で、でけえ」

もっと古くてみすばらしいビルを想像していた。そういえば面接会場も14階とか書いてあったもんね。一体なんだってんだ。

思ったより立派なビルだったという事実で俺の意識は自分が着ているヨレヨレのビジネススーツへと向かった。

ヤバイ、着てくる服間違えた。今日のところは帰って……いやいかん。俺にはもう金が無い。クリーニング代は愚か此処に来る交通費すら危うい。

このまま行くしか無いのか。まあいいさ、元々なんかの詐欺だろうし。此処だつて面接のためだけに借りた建物だつてこともあるんだから。

などとよく分からない論理を展開させた俺は、腕に組み付き「助けて」と懇願とも呪詛ともつかない言葉を発する女の霊をズルズル引きずりながらビル内へと入っていった。

腕に組み付かれた女は重く、そのおかげで歩き方も不自然になる。周囲からの奇異の視線は俺に向けられたものだろう。もう慣れている。

女を引きずるようにエレベーターまで到達すると、荒い呼吸を整えながら女に言った。

「いいか、俺はこれから面接なんだ。とにかくぶら下がったり引つ

張ったり、変な真似するなよ」

「助けて」

「面接が終わったら出来ることはしてやるから。大人しくしててくれ」

血塗れの女は笑っているつもりなのだろうか、その顔を一度不気味に歪めると一度だけ小さく頷いた。

到着したエレベーターに乗り込み、14階にたどり着くと、俺はエレベーターを出て直ぐの受付に歩いて行く。相変わらず、血塗れの女は俺に組み付いているが、さっきの取引が功をそうして重みは感じない。受付のカウンターに鎮座する受付嬢は近づく俺に気がつく、と極上の笑顔を浮かべる。

「ご用件は、お被いですか？」

そこで俺はある事に気がついた。この受付嬢、顔は笑っているが、目は俺を見ていない。

俺の腕、俺以外には絶対に見えないであろう血塗れ女を見据えている。気のせいだよな。

「いえ、そのネットで御社の求人を見つけまして。面接を受けさせて頂きたいのですが」

「少々お待ちください」

受付嬢はそう言つと、内線電話で誰かに連絡を取っている。

内線電話での問答はすぐに終わった。

「奥へどうぞ、事務所に入つてすぐの所にソファがあるのでそこに座つてお待ちください」

俺は受付嬢に一礼するといそいそと、言われた通り、受付を抜け事務所へ続く通路を抜けた。

「すげえな……」

通路を抜けた瞬間にそんな言葉を発したのは、事務所が昨今の不況を忘れさせるような豪華さを誇っているからだ。高そうな絵画、俺のような素人でも人目で高級品と分かるような家具の数々がそこにはあった。一体なんなんだこの会社は、有限会社ってこんなに儲

かるのか？

最早腕に組み付かれた女の存在すら忘れ、高そうなソファ―に腰を下ろした俺は、どこか落ち着かない気分です十分ほどその場で待つことになった。

待つこと十数分やってきた初老の男を見た瞬間俺は昨日のホームページの製作者が誰であるかを知った。なぜならその男は、どこで買ったのかを聞きたくなるような悪趣味なспанコールの入ったピンクのスーツを纏い、同色のハットを被り同色のシャツを着て同色のネクタイを締めている。

とにかく全身ピンクづくめだった。

「いやあ、お待たせ。まあ、今後の契約内容の話とかもあるからとりあえずこっちに来て」

俺の前に来るや否やその全身ピンクの男は言った。……ちよつと待て。

「あの……」

すでに俺に背を向け、歩き出そうとしていた男は呼び止められると不思議そうな顔でこっちを振り向いた。

「なにかな？」

「あの、これって面接ですよ」

「そうだよ」

「今後の契約とか言っていましたけど」

「そうだよ」

「お、僕まだ採用すら頂いてないんですが」

「ああ、そんなこと気にしてたの？じゃあ採用。はい行こうか」

「ええ!？」

なんだこのザルみたいな面接。今更だけどすげえ不安。大丈夫なのかここ。

その言葉をいい残し、男は勝手にスタスタと奥へ行ってしまった。仕方なくその男の後についていった俺が次に通されたのは、ガラスのテーブルと本皮のソファ―、が置かれた応接室と思しき場所だっ

「……冗談ですよね」

「私は冗談は好きだが、こういった場で冗談は言わないようにしている」

「じゃあ、打ち間違えとか」

「いや、これが君の年俸だ」

「0一つ多くないですか？」

「ん？いやいや多くないよ」

新人の俺の年俸はどうやら一千万らしい……。

一千万！？

「やっぱり0一個多いような」

「それだと君の年収は100万なのだが、それでいいの？」

「いや、よくないです」

即答してやった。

「危険な仕事だからね。業界じゃこれくらいが相場だよ」

「はあ」

「まあ、君も今は貰いすぎだとか思つかもしれないけど、本格的に働き始めればすぐに思うよ。割に合わないって」

「いやいや、脅かさないで下さいよ」

一千万ももらえる仕事が割に合わないってなんだよ。

「時に君、さっきから気になってたんだけど、横に引っ付いてるその女性、君の彼女？」

あまりの急展開に存在を忘れていたが、俺また取り付かれてたんだっけ。てかこの人ただのピンクオヤジじゃなかったの？

「何をそんなに不思議そうな顔をしているのかな？私は被い屋本舗の社長だよ。霊視くらい出来なくてどうするの」

そういえば、あの受付嬢もこの女の存在に気がついてた？本当に見えるの？この人たち。それよりこの人社長だったの？嘘だろ。

「い、いや、違いますよ。取り付かれてるだけです。後で何とかしますんで」

「何とか？」

「この面接が終わったなら、この霊の頼みを聞くことになってるんです」

「ふうん。それ、私が被おうか？50万で」

「いや、僕50万円も持つてないんで」

「君の年俸から天引きしとくよ」

「被うつて一体どうするんです？」

勝手に引っ付いてきた女だが、それを力づくで被うとかなら断る。なに、その手の霊は行く道が分からなくて苦しんでいるんだ。道を示せば勝手にあるべき所に還る。その手助けをするだけだよ。まあ、これからやる仕事の勉強だと思って見て行きなさい」

なそのピンクオヤジは立ち上がり、こちらに歩いてくる。俺の隣の血塗れ女の前まで来ると、その女の額付近に手のひらを差し出す。そこで俺は身構えた。この男が妙な動きをしようものなら血塗れ女を引き摺りながらも全速力で逃げられる用意を整える。

しかし、手のひらを翳しただけでそれ以上のことは起こらない。目に見えるような変化は何も現れない。なんだやっぱり嘘じゃないかと俺が安堵とも落胆ともつかない感情を抱いた時、変化は突然起こった。目の前に現れた。光のトンネル。そう説明するほか無いものが俺の目の前に突如現れたのだ。その中から溢れるように滲み出してくる暖かな感覚。血塗れ女は俺から手を放すと吸い寄せられるようにその光へと歩いてゆく。

吸い寄せられるように動いたのは女だけではない。俺もだった。あの安らぎに満ちた光のなかへ行きたい。あの光には何も無いだろう。恐怖も苦痛も苦悩も、あそこはまさに俺の求めた……

フラフラと光に向かって近寄る俺の腕は少し皺のよった手にガツチリと？まれた。呆けやようにその手を見る俺に声が掛けられた。

「君はまだ生きてるんだから行ったらいいかん」

「あつ……」

女がその光に入るとすぐにそれは消滅した。僅か10秒ほどの出来事だった。

「という、流れだ。まあ、これはケースとしては一番簡単なものだ。大半はこんな簡単じゃない」

先ほどの事など無かったかのように話し出すピンク男は自分がしたことを誇るでもなく放し始めた。

「というわけで、さて契約内容の話の続きをしようか」

促されるままに、訳の分からぬままに俺はソファアに座らされ。今後の契約内容とやらの話をただ黙って聞いていた。

さっきまでと違うのは、このピンクのオヤジを胡散臭いと思う気持ちには綺麗さっぱりと消えうせていたという事だ。

研修開始そして（前書き）

まだ二話目ですが感想や、ここおかしくねえ？等のご指摘ございまして
したよろしくお願いします。

研修開始そして

結局、あのピンクの男は本当に社長だったらしい。

氏名は戸田重蔵。年齢48歳独身。好きな食べ物は天井らしい。聞いてもいないのに自らの個人情報をつぶすあたり。コミュニケーションに飢えているのだろうか。

社長の話はさておき、数日前に行われた面接、彼が除霊を終えたその後の話の概要はこんなものだ。

社員の年俸は、その年一回の評定で決まり、最低が1000万だという事。後は能力に応じて上昇するらしい。基本給の年俸とは別にその時々働きに与えられる報奨金もあるという。労災あり。退職金もある。何やら至れり尽くせりの契約内容だが、生命保険への加入を強く勧められた。

物騒な雰囲気をつぶすに、その上謎も多い企業の社員になった俺は借りていたアパートを急遽引き払う事になった。

どうやら侵入社員の義務とやらで、三ヶ月の社員研修があるらしく、その期間は、研修所の宿泊施設に泊り込む事になるらしい。

入社と同時に振り込まれた年俸で滞納した家賃を支払い、俺は研修所のある。県へと向かった。

観光地としても有名な高原。本当にこんな場所に研修所があるのだろうか、などと半信半疑でメモに書かれた場所に向かう。ハイキングコースから横道に逸れて少し歩くと、そこはもう観光地ではなく鬱蒼とした林の中だった。

メモは面接後に渡されたものだ。存在意義を見出すのが難しいくらいアバウトなそのメモには、俺には想像もつかない、というか臭いすぎて鼻を掴みたくなるくらい胡散臭いオカルティックな処置が施されているらしく。持っていればメモが研修所まで導いてくれると聞いている。何の事かはさっぱり分からない。

とにかく、こんなメモに頼るなど、本来の俺なら考えられない事

なのだが、昨日のあの光景、女性の霊を抜った社長の手腕を見てしまつと、彼の言ったことが、正しいように思えてしまうので困つたものだ。

ハイキングコースを外れて漠然と歩き続ける事数十分。メモの効果なのかは定かではないが、白いコンクリートの建物が見えてきた。そう言えば建物の外装についての情報は一切無いな。あれがそんなのか？いや、そうに違いない。というよりそうであつてくれなければ俺が困る。舗装のされていない林の中を歩き続けるのは意外に疲れることを俺は21年間の生きてきて今日初めて知つた。

もう疲れた。ママ、抱っこ。などと状況が許すならば言つてしまいたいくらいには疲弊しているので希望的観測が多分に含まれているが、あれが目的地だという結論に達した俺は、これまでの人生で一度たりとも見せた事無い迷いの無い動作で建物へと近付いて行く。初公開、藤堂大介のキビキビした動作である。なんでか知らんがとてつもなく情けない。

建物の門をくぐつても、人の子一人見当たらないのはこれいかに違つたかもしれない。そんな風に考えながらも足は奥へ奥へと進んで行き、入り口を入つた所で横合いから半ば不意打ち気味に声を掛けられた。

「研修の方ですね。お名前をどうぞ」

その時の俺をビデオにでも撮つたらさぞかしおかしな動きだろう。要するに、物凄くビックリした。横から声を掛けてきたのは昨日の面接で受付に居たあの受付嬢だ。

今更ながら、受付嬢をしているだけあつて容姿は整っている。そして俺は美人に対すると必要以上に緊張する典型的なダメな人だ
「と、藤堂大介でしゅ」

噛んだ。

彼女は一度俺から視線を外し、持っていた紙束（おそらく研修参加者のリストか何か）を確認した後、再びこちらに視線を向ける。
「藤堂さん。はい確かに。階段上がつてすぐの部屋でお待ちくださ

い。座席は指定されているので自分の席を確認の後ご着席下さい」

俺が噛んだことなど無かったかのように振舞う彼女は、いったい何者だろうか、などと考えるのは自意識過剰だろうが、だが、美人の前でのこの失態は俺のMPを^{メンタルポイント}ごっそりと削り取っていったのは紛れも無い事実だ。

「はい、行つてきます」

よし今度は噛まずに言えた……つて、行つてきますじゃねえよ！何してるの俺？普通にはいいじゃん！なんで変なオプシヨン付けてるの！？

ほら、お姉さんなんか笑ってるよ……え？笑ってんの？

「貴方、この間面接に來た人ですよ。素敵な女性と一緒に。結構緊張してます？……ぷぷ」

まあ、引かれないだけマシかな。普通ドン引きすると思うんだけど。まあいいか。

「え、ええ、なんだかポンポン決まって、何も分からないままここに來たので多少は……」

多少じゃなくてかなりだけど。しかも緊張してるのは貴方が美人だから、アレルギーみたいなもんです。なんて言えるわけない。彼女の勘違いに感謝だ。

「まあ、これからの三ヶ月で基本的なことは大体叩き込んでくれると思うから、心配しないでいいわよ」

叩き込む、ですか。気の小さい俺にはその言葉が物凄く不穩なワードに聞こえてしまうのだが。勘違いであつてくれ。

「へえ、なら、少し安心ですました」

語尾を失敗した。もういいや。どうでも。

「そうそう、その意気。頑張つてね」

内心ビビリまくってる俺に、その意気つて、どの意気ですか。

「が、頑張りまーす」

などとイレギュラーな会話を終えた俺は最初に指示されたとおり階段を上がったその先にある一番近い扉を開けて部屋に入った。

部屋の中は思ったより広く、全体的に白い。白い床、白い壁、白い机、ホワイトボードも当然白い。

予想はしていたが、研修に参加するのは俺だけではないようだ。すでに、席には十数人の先客が座っていて、皆それぞれの方法で時間を潰している。

俺も自分の席を確認すると、そそくさと着席し、後は研修の開始を待つばかりとなった。

しかし、研修開始仕官を過ぎても誰も現れない。10分が経20分がたつても誰一人入ってくる様子を見せない。

会場内は、だんだんと苛立つ者やそわそわする者が増え始める。かく言う俺もその一人な訳で、こんな事だったら、本の一冊位持つてくるべきだったと後悔し始めた頃になり、ようやく扉がガラガラと開いき、深緑の生地に黒いラインという数日前の面接官である社長を彷彿とさせる奇妙な色合いのスーツをきた血色不良の男が会場に転がり込んできた。この会社ってこういう服が流行ってるのか？「いや、いやいや、遅れてしまって申し訳ない。昼食を食べ過ぎてしまつてね。その後、私には到底抗えない睡魔が僕に襲いかかってきてね、少しのつもりで昼寝をしていたら。こんな時簡になつてしまった」

寝坊かよ、などと考えていた俺の思考を読み取るかのようにそれを実際に口に出した猛者がいた。

「講師が寝坊ですか？」

いいのか？これ。こういうときは腹でどう思つてようとスルーするのが基本てきな処世術じゃないの？

どんな奴だと、声のした方をみて見るとやっぱりと言うか。期待を裏切らないふてぶてしい男がそこに居た。金髪、ピアス、アロハそしてあの言動である。見た所俺と同じか少し下か……どちらにせよ俺とは接点などおおよそ無いであろうその人物は不適な表情で上限一杯まで後ろに出した椅子に漫画に出てくる番長のように座っている。

というより忠実に真似てるっばい。多分その手の漫画が好きなだろう。

「いやいや、本当に申し訳ない。じゃあ、時間もおしているのだから…」

珍妙なスーツの男はもう一度謝罪をし、話を進めようとしたが、同じ男が横槍を入れた。お前一体何しに来た。

「時間がねえのは誰のせいなのかねー」

まあ、一理あるが、ごねても仕方ないだろうが。それとも何か？時間返せとか言っちゃう気なの？

「時間返せよ」

言いやがった。

無茶振りきたー！ー！ー！

これから上司になるかもしれない人間にそれを言うとはある意味英雄だよあんた。口には出さずに、心の中だけで賛辞を送ろう。

「不可能です。ですからこれからのスケジュールを巻いて予定通りに終わらせようと考えています」

「そんなに納得すると思ってるのか！？ああ！？」

いや、俺は納得してるんだけど。

「では、どうすれば納得していただけますか？私を殴りますか？いいですよ。それで貴方の気が済むのならね。私も最低限の自衛はしますが」

なに言ってるのこの人。この金髪絶対学生時代ブイブイ言わせてたクチだよ。ほら、なんか嬉しそうじゃんあの金髪。この金髪本当に何しに来たんだよ。

「あんた、自分の事、俺が殴れねえと思ってるだろ。俺はな、高校も教師殴って退学に」

「来るなら早く着なさい。時間の無駄です。強いのは口だけですか？」

緑スーツの男がそういった瞬間、俺は聞いた。金髪男のこめかみから何かが切れる音を。

勢いよく立ち上がり椅子が大きな音を立てて床へと倒れる。瞬間、会場内に緊張が走る。不安そうな表情。あからさまに迷惑そうな表情。反応は様々だが、こういった場に遭遇した時に見せるそれらしい反応。しかし会場内の大多数がそんな反応を見せている中で数人が平然としている事に俺は気が付いた。

俺が、その数名を不思議に思ってる間にも時間は当然経過している。

金髪男が、緑スーツの男目掛けて猛然とダッシュを始めたところで俺の注意は再度そっちに向けられた。

獲物に狙いを定めた獣のように駆け出す金髪男。しかし、そんな異常事態にも関わらず緑スーツの男は身構える事も無く普段と変わらぬような口調で言った。

「我々の、そしてこれから皆様足を踏み入れるのは、少々バイオレンスな世界です。ですから、血の気が多いのは大いに結構。でもね

……」

緑スーツの男がそこまで話した時、ついに金髪男が自身の射程距離に到達した。拳を大きく振りかぶり。その拳を緑スーツの男目掛け獰猛に奮う。

俺は、コンマ数秒後には、緑スーツの男の顔面が血を噴出しながら大きく後ろに仰け反る姿を連想した。周りの人間も同じだろう。会場内の空気が急速に張り詰める。

だが、そうはならなかった。

なにをどうしたのだろう。緑スーツの男は猛スピードで迫る金髪の拳を左手一本で絡め取ってそのまま投げ倒している。あの一瞬で何が行われたのかはよく分からない。倒れた金髪男は受身など当然取れる筈も無く、無防備に地面にたたき付けられ、俺にはただ手を握っているようにしか見えないが、金髪男はその後もしち上がれないらしい。

初めこそ緑スーツの男の拘束から逃れるために暴れていたが、彼が上から少し力を加えると苦悶の表情を浮かべながら悲痛に叫び始

めた。原理は分からないが倒れた男の関節を巧みに極めているらしい。

「あつ！ぐぎぎ……があああー！」

先ほどの威勢が嘘のように金髪男の苦悶に満ちた叫び声は次第に許しを請うような嗚咽へと変わっていった。

しかし緑スーツの男は表情を変えることなく男の関節をギリギリと締め上げて続け、短く言った。

「血の氣が多いだじゃ、死んじやうよ」

会場内は文字通り水を打ったように静まり返った。

業務説明そして（前書き）

今更ですが、視点を一人称にした事を後悔し始めています。登場人物が多くなるにつれて制約が増えてきます。

業務説明そして

もう止めてやれよ。そりゃ、金髪も非常識というか事の収めどころを過つてたけどよ。あんたのそれはたぶん過剰防衛じゃないのか？
しかしながら、俺が今何か吼えたところで、緑スーツの男は顔色一つ変えないだろう。

「ほら、相手との力量差を鑑みずに無謀な突進。これが実戦の最中だったら死んでますね8割方」

実戦つてなんだよ。そんな話、聞いてねえぞ。

「相手が私でよかったですね。腕の骨一本で済むんですから」
あいつ、折る気なのか！？

その後も、ギリギリと腕を締め上げられる金髪の顔には次第に苦痛よりも恐怖の色合いが濃く表れるようになり、そして、

「ボキン！！……………なんてね。冗談ですよ。折るわけ無いじゃないですか。大事な商品を」

え、演技？あれが？

それより今、あいつ俺達を商品つて言つたよな。さっきは実戦とか言つてたし。今更だけどヤベエよここ。研修前なのに不穏な空気の大売出しだよ。

金髪は緑スーツに投げられた場所から未だに立ち上がれずに肘を押さえてしゃくり上げている。あいつ、変なトラウマとか残らなければいいけどな。

「ほらほら、腕の骨はしっかりくつついてますよ。立てますか？」

緑スーツが問いかけ、金髪を立たせようと手を伸ばした瞬間、彼は情けない悲鳴を上げた。無理も無いよな。俺だってあんな仕打ち受けたらされたらああなるわ。

「困りましたねえ。上木さん、この子ええと名前は確か、比田儀君ひたぎを医務室に連れて行ってあげてください」

「はい」

名指しで指名を受けて立ち上がったのは見た目十代半ばの女の子。……って、いいのかよあれ。子供だぞ。いや、実年齢より幼く見えるだけか。

黒い髪を肩口辺りでバッサリとカットしたその子は、確か金髪が殴りかかる時に平然としていた者の中の一人だ。今だってエネルギーに満ちた気の強そうな目や、よく通った鼻筋。紅を引いたように血色のいい唇や白い陶器のような肌の中で一箇所だけ薄ピンクに染まっている頬。整った顔のどこにも同様を表すことなく言われたことをこなしている。

事務的に金髪を起すと、横から彼の事を支えて会場を出て行った。その間、全くの無音。会場内が人が居るとは思えない程に静まり返っている。

「さて」

その静寂を破ったのは当然緑スーツだった。

「大分開始が遅れてしまいましたが、これより社員研修を開始したいと思います。自己紹介がまだでしたね。今日から三ヶ月間、あなた方の教育係を任せました内村と申します。以後、お見知りおきを」

内村さん、ね。すぐにでも記憶から抹消したいがそうもいかないだろう。

「まず、我々の業務内容の簡単なお話を皆さんに聞いていただきませう。といっても難しい事は何もございません。貴方達にはこれからお被いをしてもらいます。」

さて、お被いの方法ですが、貴方達は退魔や妖怪を退治する様な青春バトル系の漫画やアニメを見たり読んだりしたことはありませんか？あれと同じ事をやってももらいます」

おい、ちよつと待て。

「漫画家や脚本家というのは凄いですね。想像力だけで、公になつていない我々の業務内容を描いてしまうのですから」

要するに、剣や槍で漫画に出てくるみたいな化け物と戦えって言

つてるのか？この男は。冗談だろ？

そんな俺を置いてけぼりに緑スーツいや、内村さんは話を先に進めて行く。

「営業部の取ってきた仕事を直接執り行う執行部。執行部は退魔課、除霊課、結界課の3課から成っており、3課は当然こなす教務が異なります。そして貴方方にはこの三ヶ月研修以降このどこかの部署に入ってもらう事になります」

ちよつと待てあいつ等と戦うのか？俺が、だってあいつ等、俺からは一切触れないんだぞ。なのにあいつ等はこっちにやりたい放題で、そんな目茶苦茶な奴等と戦うの？それ、死ねるよな。確実に。

「あの……」

悶々と思いを展開していた俺だが、研修参加者が、声を発した事により俺の注意はそちらへ向けられる事になった。

「なんでしよう？水木さん」

水木と呼ばれたその人物は見た感じ二十代半ば、俺よりも数歳年上といった風貌の大人しそうな印象を受ける女性だった。

「それって。危なくはないんですか？私は、この歳まで武道の経験もありませんし、それに運動も運動だつて得意ではないんです。それでも、危険はないんでしょうか」

ああ、同感だ。俺もそれは気になる。

「危険ですよ。下手したら死にます」

何を今更と言いたげな顔で応える内村さんのその言葉を聞いたとたんに水木さんの顔は真っ青になった。だよね、多分俺も今同じような顔してると思うよ。

「そもそも執行部というのは人員の消耗が一番激しい部署です。だからこそ常に求人をかけているのではないですか。さらに言えば、貴方方への待遇が不自然に良かったのも、そう言った事情があるからです。お分かりいただけましたか？」

「は、はい」

怯えきつた表情の水木さんを見たからだろうか。内村さんは指先

でこりこりと頭を掻きながら付け加えた。

「まあ、必要以上に怖がる必要はありません。貴方達が現場に行っても生き残ってもらえるようになる為にこの三ヶ月間、研修期間があるのですから」

三ヶ月。逆に言えば俺達が業務とやらに放り出されるまでに許された時間だったの三ヶ月しかない。

「まあ、例外もいますけど、多くの方達は、今日始めてこのような商売があることを知った方も多いでしょう。そんな全くの素人を、ある程度使えるまで鍛えるのです。血尿がでるくらいは想定しておいて下さい。とはいえ、危険である事には変わりないので、私の話を聞いて気が変わったという人はご退出ください。その際は契約は白紙に戻りますので、先に振り込まれた年俸の返却をお願いする事になります」

ああ、これははめられた。だつて俺アパート引き払う時に少し金使っちゃったもん。ここに来るまでの交通費も出るとは思えないし。他の連中も多分そうなんだろう。

と思つたら、一人、二人と席を立ち始め、次々と会場を後にして行く。まだ、使つてなかったんだねおめでとう。今日だけは自分の経済力の無さが恨めしい。

当初は二十人近く居たはずの研修所には俺を含め八人しか残らなかった。

「おや、貴方は残るのですか？」

会場内に残った面々を見回す内村さんはその中に蒼白な顔で座り込む水木さんを見つけて訊ねた。

「わ、私は既に頂いたお金の500万使っちゃってます。で、ですから。返せといわれても返せません」

「なるほど、しかし別に今すぐに返せとは言つてませんよ。お金が出来たら返しに来てくれれば良いと言つたら、どうしますか？」

それを聞いた途端、水木さんの目が右に左にと泳ぎ出す。

暫く沈黙が続き彼女は震える声で内村さんに訊ねた。

「ど、どんなに仕事が出来なくても。ね、年1000万は保障していただけるのですよね？」

「はい、保障いたします。それどころか働きに応じた報奨金、臨時ボーナスをお支払いさせていただく事もございます」

「なら、私は残ります」

「結構。他の方はよろしいですか？」

この機を逃したら戻れなくなってしまう。俺は死ぬのか？これでいいのか？大体この研修にだって。半ばやけくそで……、今戻れば――。

藤堂君、君。明日から来なくていいから。――部長からの解雇通告。

藤堂つてさ、悪い霊に取り憑かれてるらしいぜ。じゃあ、今会社で起きてる怪現象つてあいつが居るから？そうだよきつと。うわやべエ俺今朝あいつにぶつかつちまったよ。変なもん付けられてないよな。――同僚達の噂話。

……戻ってどうするんだ？俺。

普通の社会で生きていく事が出来なくて今ここにいるんだろ。なら、戻っても俺に居場所は無いのか。

もついい。どうでも。

「それでは、ここに残った全員に入社の意思ありと判断し、今後はそのつもりで話を進めて行きます」

もうどうにでも、なつてくれ。

対峙そして（前書き）

今回、なれない事をしたからか。全体的に不自然な感じがします。
なんか手を加えて改善したいけど、どうしたらよくなるのでしょうか？

対峙そして

波乱の研修初日は、俺達8人がこの場に残った時点で終了となった。ザルのような面接でここまで来た俺達をこの研修で振るいに掛けようという意図が見え見えだ。考えすぎだろうか。

その後本日残った八名はこれからの研修中、唯一の安息地となる寮へと案内された。寮が個室なのは正直助かった。赤の他人と三ヶ月も同じ部屋で過ごすのは精神的にかなり来るものがあつたからだ。寮は個室でも流石に食事までは別々というわけには行かず、午後6時、寮の一階にある食堂に全員が集合して食べる事になる。

大勢で食事を取るのは久しぶりの事だった。会社でも学校でも孤立していた俺にとつて、大人数での食事は中学生時代の給食以来と言える。まあ、いい思い出など無いのだが……

集団で囲む食卓という異常事態に内心ビクビクしていた俺。理由は簡単。集団に馴染める気がしなかったからだ。和やかな空気で談笑しながら飯を食う皆の中で俺一人、会話に参加するきっかけがつかめずに縮こまり、黙々と箸を動かすだけの風景を想像するだけで胃が痛くなる。

暗澹^{あんたん}たる気分で食堂まで向かった俺だが、初日は皆もまだ緊張しているらしく、積極的に口を開くものはあまり現れなかった。一人だけ場の空気を盛り上げようと頑張っている男がいたのだが、周りの反応があまりにも薄く終盤は萎んだ風船のようになっていた。

その様子はまるで通夜だが、夕飯を食すという本来の目的を果たすための効率は良かったらしく、全員が短時間で夕飯を食べ終ったのは本日唯一評価すべき点だろう。

でもって、俺は自分だけが除け者にならずに済んだことにどこかホッとしながら自室でシャワーでも浴びようと部屋のドアを開けた時の事だった。そこには既に先客が居た。

そこには、下着姿の女性が立っていた。見られた方は、履いてい

たスカートが膝まで下ろした体勢で固まっている。表情もキョトンとした状態で固まっている所を見ると何が起こったのかを上手く処理できていないらしい。

彼女は確か、しゃくり上げる金髪を医務室まで連れて行った子だ。名前は確か上木さんだっけか？見た目が十代の半ばなので女性というよりも少女といった方がいかもしれない。主観だが容姿は整っていると思う。21年間、生で女性の服の下などを見ることは生涯一度たりともないだろうと思っていた俺に突如転がり込んだその光景は俺の判断力を刹那の間奪うには十分なもので、すぐに部屋を出ればよかったものを数秒間凝視してしまった。

あれ？目の前の子って見た目はどっちかって言う子供っぽいよな。そんな子の下着姿に心を乱す俺って。ロリコンじゃねえよな？違う！断じて違う！！等という思考を展開しながらも目の前の少女から視線を逸らさないあたり、どうやら俺は思ったよりスケベらしい。

ようやく正常な判断力が戻ってきた俺が真っ先に考えた事と言えば一刻も早くこの場から離脱しなければならないということだ。

「ま、間違えましゅた」

咬んだ。しかし言い直すのも面倒で、俺は半ば逃げるように部屋から高速離脱する羽目になった。

宿泊寮の正面入り口の真裏には建物に隣接するように簡素な造りのベンチが置かれている。部屋を逃走した俺はそのスペースで一人頭を抱えていた。

「やってしまった」

研修初日。俺は入る部屋を間違えるという重大なミスを犯した。明日にはこの話は研修生全員の間にも広まり、俺は覗き魔のレッテルを貼られる事に……。

もうダメだ。終わったよ、俺の人生。

「見つけた」

頭を抱える俺に唐突に掛けられた声で、もしかしたら一瞬止まっ

たかもしれない心臓は声の主を特定した瞬間、早鐘を打ち始める。

「私の着替えを真正面から覗くとはいいい度胸ね」

なぜなら、ついさつき俺が着替えを見てしまった少女が物騒な刃物片手に佇んでいたからだ。「真正面から覗く」とは言葉の使い方としては適切ではないのでは？などと言えるはずもなく。俺は馬鹿みたいな表情で彼女を見据える事しか出来なかった。

だって、あいつが持つてるの刀だよ。殺生のためだけに作られた道具だよ。なんであんなもん女の子が持つてるのさ。しかも構えたよ。正眼に構えられた刀の切っ先はまっすぐ俺を捕らえている。

「よし、とにかく落ち着こう」

「黙れ変態！」

聞く耳持たない。取り付く島もない。これらの言葉は今の彼女の状態を言い表す為だけに作られたものであると錯覚するほどだ。

しかしよく見ると目尻にうつすらと涙が溜まっているあたり、よっぽどシヨックだったらしい。だからといって切られてやるわけにはいかない。腹を括り彼女と対峙する。さらに丹田に意識を集中させ、あらゆる状況に対応できる状態を作り上げる。

「何よ、全くの素人かと思ったら。意外と様になってるじゃない」俺の構えを見た彼女の顔が怒りに任せたものから急激にさめて行く。

「生憎、俺の実家は剣道の道場なもんでね」

これは事実だ。

「ふん、だからって丸腰のあんたに私がどうにかできると思ってるわけ？」

「出来るさ」

自身に満ちた俺の返答に彼女の警戒心が増す。刀を握る手に力が籠る。対する俺は、両足に力を溜めて体制を低くする。さらに腹にあらん限りの力を込めると俺は行動を開始した。

「危ない！！後ろだ！！！！」

突如張り上げた俺の大声そして警戒を促す拳動で、彼女は反射的

に後ろを振り返る。

今しかない。そう判断してからの俺は早かった。

自分の軸足に力を込めるとその足を支点に一八〇度体を回転させると砲弾のように駆け出した。簡単に言えば逃げた。

「うおおおおおおおおおおおおおおお！！」

持ってくれ、俺の脚。あと少し、あと少しなんだ。目的地は研修所の敷地外の雑木林。ほとぼりが冷めるまでそこに隠れよう。

そう、ある時を境に強気になった俺を見たら彼女もおかしいと思うだろう。そうなれば警戒する。何か隠しだねが、切り札といえる何かが目の中の男にはあるのだと彼女に錯覚させる事に成功した俺の計画は次の段階に移動する。

彼女は文字通り俺へと意識を向けただろう。その俺が、抜群の演技力で彼女に警戒を促したらどうなるだろうか。意識の大半を俺に向けていた彼女は当然他への注意が散漫になる。だから普段なら絶対に引つかからないような古典的な罠にまんまとかかった。

それにあれだけ自身に満ち溢れていた男がまさか逃走を企てるなんて思わないだろうしな。

そして此処からは俺のフィールド。二十一年間、数多の悪霊を振り切った俺の俊足^{にげあし}は並大抵のものではない。女性、しかも子供に追いつけるものではないわ！！

これだけ走れば、彼女と俺には埋めようのない差がついている筈。これで俺を脅かすものは何もなくなつたと言つていいだろう。

「ふふふ、ハハハハハハハハハハ。かかったな小娘が、大人を嘗めるから、こういう目に逢うんだ。ふははははははははは……はあああああ」

やべえ、すげえ情けない。なんだか走ってるのが馬鹿らしくなってきた。21年間で獲得したものとえばこの逃げ足ののみ。なんなんだろうこの人生。一人雑木林で立ち尽くす俺は適当な木に背中を付け、ズルズルと座り込む。

「やべえ、今日は助かったけど明日からどうしよう」

誰かの返事など期待していなかった。ただ呟いただけだ。

「あんだ、意外に早いよね。まさか逃げると思わなかったから完全に不意を突かれたわ」

この世に神はないのだろうか。そんな思いを抱きつつ。俺は自分が引き離したと思い込んでいた少女へと視線を移す。その途中で俺は気付いた。

「そうね、それに此処ならあんだをやっても誰も気がつかないわ」

少女が何かを言っているが、その言葉は俺の中では既に無意味な文字の羅列となっている。俺の注意は彼女の後ろにうつすらと見える何かに向いていた。始めは気付かない程薄かったそれは、今でも目を凝らしてようやく視認できるくらい。だが分かる。あれはやはり。絶対にだ。関わったら、死ぬ。

「やばい」

「あら、今頃気付いたの？」

そうじゃない。そうじゃないんだ。

「う、後ろ」

「あんだまだ懲りないの？」

クソ！完全に狼少年だ。

「後ろだ！！気がつかないのか！！早く逃げろ！！」

「いい加減に……っ！！」

言い掛けたところで気がついたのだろう。急いで振り返るが、既に遅い。うつすらとしか見えないそれは、腕のようなものを横一線に薙ぎ払い、少女を吹き飛ばした。彼女も避けきれないと悟るや持つていた刀で何とか防御はしていたが、それがどの程度役に立っているのかは分からない。

「おい！！」

俺は横目で正体不明の怪物を気にしつつ、吹き飛ばされた少女の方へと駆け寄る。

「大丈夫か！？」

抱き起こしてはみたが、体に全く力が入っていない。息はしてい

るもののぐつたりとしていて全く意識を取り戻さない。

「しつかりしろ！！おい！！おい！！」

ダメだ。クソ！！

こうしてる間にも正体不明のそれはゆっくりと俺たちに近付いてくる。死ぬのか？俺はここで。こんな所で。その時、一つの考えが浮かび、俺の視線は自然とその考えを実行するに不可欠な存在、腕の中でぐつたりする少女に向く事となる。

こいつを囷にして、俺は逃げる。恐ろしいそしておぞましい考えだ。しかし、考えようによっては現状で助かる確立が最も高い方法だ。最初はそんな事出来ない、してはいいはずないと、その考えを律する思考も存在した。だが、葛藤を繰り返すその間も、彼女を吹き飛ばした怪物は俺達に一步また一步と近付いてくる。

奴が近付くたびに頭の中に住まうもう一人の俺、冷酷で利己的で残忍な人格の俺が魅惑的にささやく。

いいじゃないか。赤の他人がどうなるうと……。人間はどう足掻こうと、利己的な生き物なんだよ。お前は人間だ。仮にこの子を見捨ててもそれは人間の性がさうさせたただけだ。お前が悪いんじゃない。

この世に存在する全てのものは有限だ。得る為には取り合うしかない。それは形の無い概念的なもの、例えば命だってそうだ。生きる権利もな。誰かが生きる為には誰かが犠牲になるんだ。それが人間、いや世界のルールだ。楽になれよ。今お前が必死に抗ってる恐怖とやらに全てを任せればいい。

そして俺はとうとう、奴が近付く重圧に耐えられなくなった。恐怖に理性や常識、モラルそういったものの全てが塗りつぶされる。最後に残った思いは極めて原始的。生きたい。ただそれだけだ。

「あああああああ！！」

俺はそれまで腕に抱いていた彼女を突き飛ばすと、這うようにして奴から距離を取った。しかしそれ以上動けない。俺に残った最後の良心が俺をこの場に引き止めているのか。奴への恐怖でただすく

んでいるだけなのかは分からない。

震えながら涙を流す俺を嘲笑うかのようにゆっくりと移動する奴は、ついに彼女の前まで到達し、その姿を露にした。

醜悪でおぞましい外見が露になる。どうやって生物として成立しているのだろうか。人の手や足、顔などが寄り集まり一つの体を形成している。それらは一つ一つが意思を持つかのように蠢き呻く。^{うごめく}腐敗しているのだろうか。強烈な腐臭が漂う。それらが形作る手のようなものが未だに意識を失っている少女へと伸びる。

「なん、で」

なんで、なんで俺がこんな目に遭う？俺が何したってんだ！？何もしてねえじゃねえかよ！！

なにも、して、ない……その考えに行き着いた瞬間。恐怖に支配された俺の思考が急速に冷えこんだ。

そうか……。俺は何もしてない。全てを自分の体質のせいだと決め付け、何をやっても無駄だときめつけ。靈魂の见えない周りの人間を羨み妬むだけの日々。クソみたいな生き方だ。

だからこんな目に遭うのかはわからない。でも、流れに身を任せてダメなら。流れにのった結果がこれなら……その流れに抗うのも、ありか？

「ありだ」

俺は適当な長さの棒切れを拾うと力の入らない足でゆらゆらと立ち上がる。奴を見ただけで吐き気が込上げる。膝が笑う。その足に必死に動けと命令を下すが、思った通りに動かない。

俺がこれから取るうとしている行為に抗うようにもう一人の俺が囁く。

やめとけ。お前には無理だよ。俺は知ってる。お前は小心で利己的だ。早く逃げろ。自分に正直になれ。

認める。それは認めるよ。俺は小心で利己的だ。でもな、小心で利己的だからってその気持ちに負けたら、俺はもうダメなんだよ。

俺は小心だから。今、目の前のあの子を見捨てて自分が助かる道

な。それにしても俺、今日何回やばいって言ったつけ。等と場違いな思考をしてるあたり、どうやら年貢の納め時らしい。まあ、最後は、俺にしては良く頑張った、のか？結果はこんなだけだな。

しかし、化け物の向こう。意識を失っているはずの少女だけが気がかりだった。

「すまねえ」

着替えを除覗いたことが、まさかこんな事体に発展するなんて本当にすまねえ。威勢良く飛び出してもこの様だ。本当にすまねえ。

そんな気持ちで彼女が倒れてるであろう方向を見た俺は、そこに彼女が居ないことに気がついた。

意識を取り戻して逃げたか。

「ああ、よかった」

そんな言葉が出てきた事には、俺自身が一番驚いた。

全く最後の最後でこれかよ。ありがとよ神様。死ぬ前に少し自分が好きになったよ。

「自分が死にそうになってるのになにを笑ってるのかしらこの変態は」

最後に俺を口汚く罵ってくれてありがと……おい。

俺が突っ込んだ直後の事だ。こちらに向かう化け物が縦にバツサリと両断された。活動を停止した化け物が地面に崩れ落ちるその後ろから現れたのはさっきまで意識を失っていた少女。彼女に向かって俺は一言。

「あ、ありがとう」

その言葉を最後に俺は意識を失った。

研修の一端そして（前書き）

今回、このまま書き続けると文字数が多くなってしまうそうなので
かなり中途半端なところで無理やりぶった切ってます。ご了承ください
：

研修の一端そして

研修開始から一ヶ月と半月建つ今日、幽鬼のような顔で運動場を走る俺達研修生に課せられた業務は基礎体力作り。早朝から朝食までの間、馬車馬のように走らされるのが、この一ヶ月の常だ。

今朝も今朝でかれ一時間以上走りっぱなしだ。運動場のトラックは一周で400メートル。八周までは数えていたが、それ以降は無意味なので数えていない。何せ担当の教官がいいと言うまで走り続けるのだから。しかも基礎体力訓練の担当というのが、

「おい！お前等！この私が大事な大事な時間を割いて、お前等みたいなケツの青いヒヨツ子の訓練に付き合ってやってるんだ。キリキリ走れグズ共！」

あの調子なのだ。一時間以上ぶっ通しで走らされ、いい加減疲れの見え始めた研修生達に容赦なく罵声を浴びせるジャージ姿の女性。体育会系を通り越し、どこぞのチンピラのような口調の彼女こそ基礎体力訓練の担当教官、綴利薫つづり かもるその人だ。

がさつな性格を象徴するように、アッシュブロンドに染めた短い髪は荒れ狂う大海原の如くうねり、鋭い目付きは見たものを石に変える力でもありそうだ。等と目茶苦茶言ったが、腹立たしい事に外見は決して悪くは無いのだ。顔つきは中性的で、彼女の関して容姿に限定して言わせてもらえれば中性的な美女または美男と言えなくも無い。しかし怖い。とにかく怖い。人は見かけによらないという諺があるが、彼女には本来の使われ方とは逆のベクトルでそれが当てはまる。

彼女とヤクザのどちらかとメンチを切り合わ無ければいけない状況になれば、俺は迷わずヤクザとメンチを切り合う。それぐらい怖い。

その時は、どっちにしろ死ぬだろうけど。

「おいコラ藤堂！！テメエ亀が逆立ちしたような速さで走ってんじ

やねえ。テメエは亀か？亀なのか！？トロトロ走ってつと池に叩き落すぞこら！」

あの人なら本当にやりかねない。なけなしの体力を振り絞り俺は速度を上げる。やばい、死ぬ。

「なんだよ。やっぱりサボってやがったか。お前、私がいいつつうまでそのスピードで走ってる。藤堂以外は止まれ。休んで良いぞー」
「そんな殺生なあ」

「私は仏教徒だ。殺生はしねえぞ。無駄口叩いてないで走れ。飯の時間まで走らせるぞ！」

嘘だ！あいつ絶対二、三人やってる。

「冗談だ」

何だ冗談か。そう思って止まろうとした時、いつの間にそこにいたのか。知らぬ間に俺の後ろに回りこんでいた綴利教官が俺の頭を平手で叩いてきた。

「なに休んでんだよ。お前はまだまだってて言ったじゃねえか」

「いや、だって今それは冗談って」

「お前馬鹿だろ馬鹿。私が仏教徒だってのが冗談だって言ったんだよ。私が仏教徒に見えるか？お前の目は節穴か？」

あんたの冗談は分かり難いんだよ。

「おら。分かったらとつと走れ。みんなお前が終わるのを待ってるんだよ」

断言しよう。あいつら、絶対待ってない。あと一時間は走ってると考えてるに違いない。

結局俺が綴利教官からのシゴキから解放されたのは朝食の少し前で、食堂に入った段階で俺は限界を越えていた。

フラフラと食堂に入り、朝食の乗った盆を持って空いている席に着く。今日の朝食は焼き魚を主菜とし、副菜に冷奴とほうれん草のお浸しが添えられ、主食に米（当然だが炊いてある）汁物には豆腐と油揚げの味噌汁という朝食としてはオーソドックスなものだったが、あれだけの運動をした直後だ。すぐには食べる気になれず、そ

のまま机に突っ伏していた俺の隣、にこの一ヶ月で顔見知りになった糸目の男が腰掛けてきた。

「いやあ、藤堂は今日も絞られてたね」

はすみ きょうしろう

蓮実京士郎信じられない事だが、この研修で俺に出来た知り合いである。因みに研修初日で通夜のような晩餐を何とか盛り上げようと奮闘してたのがこいつだ。

「蓮実か。いつもの頼む」

俺のその言葉を聞くなり、待つてましたと言わんばかりに細い目をさらに細くしていやらしい笑いを浮かべる蓮実は机の下から、背中に担げるぐらいの木箱を出すと、朝食を押しつけて出来たスペースにどんと置いた。木箱には幾つか引き出しがついていて、その中に研修始つて以来お世話になりっぱなしのブツが中に収められている。俺はもうあれ無しじゃ生きて行けない。

「いつものでいいかい？」

手もみしながら聞く蓮実に頷くのも面倒な俺は自分の財布から一枚お札を取り出すと蓮実に手渡した。

「毎度。藤堂さん、霊シップお買い上げー」

研修開始以来すっかり恒例となつたやり取りを経て、目的のブツを入手した俺は、それを体の節々に張つて行く。蓮実の家は代々退魔を生業としている家系の一つだ。彼の家は退魔業以外にも霊具れいくと呼ばれる。不思議な力を持つ道具の精製もやっているらしく、どちらかと言えばそっちで有名な家らしい。

たつた今彼から買った霊シップもその一つで、ネーミングはともかく効き目は普通のシップ薬とは比較にならない。その効き目は、俺が研修初日に負った全身打撲を一日で完全修復するほどだ。研修中の筋肉疲労を和らげたりする事にも絶大な効果を發揮している。しかし、藤堂は今やすっかり俺のお得意様だな。やっぱり医務室に担ぎ込まれたお前に営業かけといて正解だったな」

そい言えばそんな事があつたな。もう、大分昔の出来事に感じるが、あれからまだ一ヶ月と少ししか経っていないのだ。

俺は蓮実と初めて知り合った時の事、正確にはその少し前の事を思い出していた。

研修初日、化け物に襲われ、意識を失った俺が目覚めたのは研修所の医務室だった。

「やっと、起きやがったか。お前が余計な仕事増やしてくれたからこっちは残業する羽目になったんだよ馬鹿野郎」

目覚めると同時に人を馬鹿野郎呼ばわりしたジャージ姿のガラの悪い女。どうやらこの人が俺に付き添ってくれたらしい。彼女は不機嫌そうにジャージのポケットから煙草を一本取り出すと火を点けた。

「たく、研修生の馬鹿二人は初日から亡者に襲われるし、しなくてもいい残業に繰り出されるし、煙草は高いし。今日は厄日だな」

煙草と厄日は関係ないと思うが。そう言えばあの子はどうなったんだ？

「あの……」

「ああ？」

まだ何も言っていないのにそんなに睨まないで下さい。目茶苦茶怖い。

「もう一人、女の子がいたと思うんですけど、その子は大丈夫だったんですか？」

「ああ、上木か。大丈夫か？だつて？あいつは退魔の名門の娘だぞ。お前が心配なんて100万年早いんだよアホ。だらしく伸びてるお前を、此処まで運んで来たのも上木だよ。あいつはお前と違って簡単な手当てだけですぐに戻ったよ。大体の話はあいつから聞いた。研修始めたばかりのヒヨつ子がナイト様気取って亡者に挑んでんじやねえよ馬鹿、カス、死ね」

その時俺は、小柄な少女にお姫様抱っこされる自分を想像してしまい、情けなさのどん底に叩き落とされたのは秘密だ。それより口悪いなこの人。

「亡者ってあの化け物のことですか？」

「ツたりめえだろ馬鹿。他になにがいるってんだカス。お前脳みそ入ってんのか？」

「は、入ってます」

「本当かよ？」

胡散臭そうに俺を見つめるジャージ女、うわ、すげえ腹立つ。腹立つけど目茶苦茶怖いよこの人。俺、本物のヤクザ屋さんを見たこと無いけど、この人とヤクザどっちにビンタしろって言われたらヤクザにビンタするわ。

「本当です。それで亡者ってなんなんですか？」

「お前、人に聞きゃあ教えてもらえるのが当たり前と思ってるクチか？自分で考えるドアホ。と言いたいのは山々だが、内村の馬鹿にあれが何か説明するよう言われてるしミジンコみたいな頭脳のお前でも分かるように教えてやるよ」

この女は人を罵らなきゃ話を進められないのか。

「亡者ってのは死者の魂の集合体だ。何らかの拍子に普通の霊が悪

靈化しちまうつてのは良くある話だ。悪靈化する時つてのは目茶苦茶苦しいんだ。たまたまその最中に別の浮遊霊や少し霊力の強い人間が傍を通りかかるとその苦しみから逃れようとそいつ等を取り込むんだ。汚れてない霊力や魂を補充することで一時は苦痛を緩和できるからな。そうなつちまうと悪靈化は中途半端なまま止まっちゃう。

普通の魂を取り込んで苦痛を和らげることが出来るのはほんの一時だ。時間が経てばまた苦しみが戻ってくる。再び襲ってきた苦痛から逃れるためにまた取り込む。それが繰り返される内に、並みの悪霊よりも遥かに強くて始末の悪い存在になつちまうんだよ。それが亡者だ」

成る程、などと頷いてはみるが実は良く分かん。

「つまりあれですか？もしも俺があいつ等に取り込まれてたら俺もあいつ等と一緒に苦しむというわけですか？」

「そうだ。まあ、苦しいって思えるのは最初の数日だけだ。その後は自我なんてなくなつちまうから安心しろ」

あ、あいつに取り込まれなくて良かったああああ。

「おし、お前は目覚めた、話も済んだ。というわけで私は自分の部屋に戻る。お前もとつと戻れ。明日死ぬほど走らせてやるから」

なんでそうなる。しかも俺怪我人、などと口に出す勇気などあるはずも無く。一人医務室に取り残され、暫し放心した後、化け物に吹き飛ばされた時に打撲でもしたのか、ズキズキと痛む全身を引き摺って医務室を出たのである。

以上が一ヶ月前に化け物と対峙した後の顛末だ。その後、俺の部屋に上木由奈がやってきた時には絶対に殺されると覚悟を決めたのだが、彼女は無言で俺の事を探るような目つきで眺め回して自分の部屋に戻って行った。あれは一体なんだったんだ？

まあ、あれ以来、互いに不干渉を貫いているわけだし、特に困った事は無いんだからいいんだけど。

因みに上木由奈が去ったその暫く後、蓮実が痛みに呻く俺の部屋にズカズカト上がりこみ。試供品とかいって霊シップを置いて行ったのはまた別の話である。しかしながら、この研修。癪なことに蓮実が、正確には蓮実の霊シップがなければ俺は死んでいたかもしれない。

「藤堂、飯いらならくれよ」

蓮実のそんな声が聞こえ我に返った俺は、返答を待たずに焼き魚目掛けて伸びてきた腕を急いで叩き落した。

「やらん」

急いで朝食をかき込み、食器を返却口に返した俺は朝食を貰い損ねてブー垂れている蓮実と共に、午前中の研修会場へと移動しようと食堂を後にした。

研修生の人数は全部で8人。そのうち3人が退魔の家系の出身者で、残りは全くの素人だ。全くの未経験の俺達素人と小さい頃からこの世界で生きて行くための教育を受けてきた者達とは当然知識にも技量にも開きがある。

その差がもつとも顕著に出るのが、朝食後、に行われる午前中の研修だった。

「丹田で練った靈氣が全身に広がるようなイメージを持って下さい」
漠然とした内村さんの指示を退魔の家系の出身者は淡々とこなして行く。

彼等の体を取り囲む色のついた空気のようなものが『靈氣』なのだそうだ。これを体内で練る事で身体機能を底上げしたり、体外へ放出して幽靈に干渉したりすることが可能になるらしい。逆にいえばこれが操れないと、今後の業務に入れないらしい。

つまりこの靈氣とやらをコントロールできるようにするのが午前中の研修の主な内容だ。

どんな事をやっているのかといえば、120?程の部屋の中に研修生八人+担当教諭一人が集まり。ただひたすらに靈氣を練るという恐ろしく地味な訓練を執り行っている。今は体内の靈氣を体外へ放出する段階だ、体外に靈氣を放出できるようになれば、靈的な存在に干渉することが可能だがそれは幽靈に触れますといった程度のものでより大きな効果を生み出すために使われる方法とはいえば、放出した靈氣を靈装と呼ばれる武具に纏わせることらしい。靈装とは、靈的な力を宿した武具の事らしく。例えば妖刀や聖剣といった物がそれにあたる。靈装に靈氣を通す事で通常より容易に大きな干渉力を得ることが出来るとの事だ。

同じ人物が靈装無しで靈氣を練り靈装並みの効果を得る場合は、体内で靈氣を練りこむ練↓練った靈氣を放出する発↓放出した靈氣を操作し干渉し易い形にする形↓靈氣を固着させ先に作った形を維持する硬といった手順を踏む必要があるらしく、戦闘時にこれが出るとしたら熟練した退魔師や靈氣の扱いに精通した呪術師だけだという。

それに加えて練りこむ靈氣の量も靈装を使った時より多くなるらしくとても合理的とは言えない。

靈装を使った場合は、先に上げた四つの作業の中でもっとも難易度の高い形の手順が省ける。さらに練りこむ靈氣も少量で済む為、優秀な退魔師でも靈装を装備するのが普通だという。そういえば、

研修初日に上木が亡者を切り捨てたときも刀を持っていたもんな。

それが、一カ月半の研修で俺が学んだオカルト知識だ。親が知ったら泣くな。

始めはオカルト臭全開な研修内容に懐疑的だった俺も、目の前でその霊気とやらを見せられては信じるほか無いわけで、今では、時折聞こえるいい年こいて自分は何をしているのかという自嘲の声を押し込んで訓練に励んでいる。

霊気で思い出したのだが、小さい頃に見た映画の内容で向かってくる悪霊に対して主人公が九字（邪気を退ける呪術らしい）を切るシーンを見たことがある。あの臨、兵、闘、者……ってやつね。当時俺は他の人には見えない存在に本気で悩んでいたし、子供心に奴等に好き勝手されるのは悔しかった。だから、自分に憑こうとした悪霊にこの野郎という気持ちで九字を切ったら酷い報復を受け死にかけた事があったんだ。それからこう言った類のことは一切やらないことにしていたのだが、なんとまあこの歳になってやるとは、人生って分からないものだよ本当に。

そういえば俺はあの時どうして助かったのだろう。物凄い力で首を締め上げられ、子供心にもダメだと思って、現に意識も失ってしまった筈なのだが、目覚めたのは自分の部屋だったのだ。悪霊の気配も綺麗に消えていたし。誰かが助けて部屋に運んできたとしたか考えられないが、実際の所どうなのだろう。あの頃のことは今考えても分からない。

ただ、部屋で目覚めた俺に事の詳細を訊いてきた親父に事情を話したらひどく怒られたのを覚えている。普段は馬鹿な事ばかりしていた親父が本気で怒ったのはあの時だけだったかもしれない。

などといった間にか小さい頃の思い出に浸っていた俺を目聡い内村さんが見逃すはずも無かった。

「藤堂さん、起きてますか？」

「あ、すいません」

なんとも間抜けな返事である。とにかく急いで自分の中の霊気と

やらをひねり出そうとするのだが、どうにも上手く行かない。というより、靈気を引き出そうと考えるとどうにも嫌な感じがするのだ。上手く表現できないが、見てはいけない親父の秘密を垣間見てしまった少年時代の記憶を髣髴とさせるような感覚だ。それは吹けば飛びそうな俺の集中を乱すには十分で、せっかく体内で靈気を練り上げてもすぐに胡散してしまう。

今だ、発を使う事が出来ない俺だが、それでも一つ分かった事がある。俺が今まで悪霊から逃げるときに発揮していた俊足は、体内で練り上げた靈気で身体機能を上げたものだったということだ。つまり体内で靈気を練る練は昔から出来たわけだ。問題は発だ。これをやろうとすると絶対にあの嫌な感じがするわけで、どうしたものかと頭を抱える事しか出来ない。

俺以外の素人から始めた者達は、退魔の家系の者よりは不恰好ながら発に慣れ始めている。要するに俺が一番出来が悪いのだ。

「はああああああ」

思わず溜息が出る。何故自分はこんなに不器用なのだろう。他の人と同じようにやっても俺の成長は人よりも遅い。いや、成長しているのかすら怪しい。普通の人で3でレベルアップできる所を俺の場合は10必要なのだ。勿論持つて生まれた素質には個人差があるのは重々承知しているが、こりゃあんまりだと文句の一つもいいたくなる。

「藤堂君」

内村さんに呼ばれて振り返った俺はさぞかし間抜けな顔をしていたと思う。なぜならそこには内村さんの他に、一ヶ月前半前に陰悪なやり取りをしたはずの上木がいたからだ。

「ちよつとこつちへ」

そう言つて部屋を出て行つてしまった内村さんと上木。拒否する間も無かったが、仮にあったとしても拒否する勇氣等ミジンコほども持ち合わせていない。仕方なくついていった俺が通されたのは、医務室だった。

内村さんにベッドに横になるように指示され。怪訝に思いながらも横になった俺を見ながら内村さんは話を続けた。

「上木さんからあなた達が亡者に襲われた時の話を聞いてからもしやとは思っていたのですが、あなたどこかで封霊術を掛けられているかも知れませんか。ハッキリと確信があるわけではありませんが…」

なに？何言ったのこの人。ほうれいじゅつ？なんすかそれ。

頭の中を？で一杯にする俺の間抜け面が面白かったらしい内村さんは血色の悪い唇を吊り上げると頼んでもいない説明を始めた。まあ、どの道説明を求める事にはなっていたと思うので流れに身を任せることにする。

「本来、高位の術者が修行の為、自らに施す術です。霊力を押さえ込んだり体内の霊気の流れを乱したりすることで本来の霊的な力を底上げする為の封印術です」

ああ、大リーグ養成ギブスみたいなもんか。

「それにしても不思議ですね。何故退魔師ではないあなたに封霊術が施されているのでしょうか？おっと、まだそうと決まったわけではありませんね。それでは上木さん。よろしく願います」

内村さんが言うのと、短く「はい」と答えた上木が無言で近付いてくる。なんだよ。金なら持ってねえぞ。俺に触れられる距離まで近付いてきた上木の顔は不機嫌丸出しだった。彼女は黙ってこちらへ腕を伸ばすと俺の胸に軽く指を添えた。どうでも良いが、くすぐったい。

そして、大きく息を吐くと同時に、俺の胸をその指先で勢い良く突いて来た。何やってんだ？突き指するぞ。という俺の親切心溢れる突っ込みは不発に終わった。なぜなら上木の指先は俺の胸を突きぬけ体の内部へと入っているからだ。その指先は、ズルズルと奥まで進み、最終的に手首まで入ってしまった。

痛みは無いので物理的に貫通したのではないのだろう。変わりに体の中で虫が蠢いているかのような猛烈な不快感が込上げてくる。

「き、気持ち悪。てかなにこれ。体の中に手突っ込むってセクハラもいいところだろ」

不快な感覚で吐きそうになるのを堪える代わりに吐露した暴言は当然目の前の上木にも聞こえたらしく、不機嫌そうに顰めた顔をさらに顰めて俺を睨みつけた。

「うるさい。こっちだって好きであんたの体に手突っ込んでるわけじゃないのよ。あんまりグチグチ言ってるこのまま息の根止めるわよ」

体に手が入った状態でその台詞は洒落になりません。俺は彼女に文字通り命を握られた状態になったのだ。

「上木さんのご実家は退魔師として以外に心霊医術の方でも有名です。というか出来る人ってそんなにいませんけどね。人の体内に巣食った、さらに厳密に言う则有体と同化してしまった物の怪を強引に引きずり出したり出来ますから便利なんですよ」

そんな事はどうでもいいんだよ。

「予告も、なしに……こんな事して、なんなんですか……うぷ」

込上げる吐き気を何とか堪えた俺はギョツとした表情の上木と目が合った。

「吐いたら心臓潰すわよ」

だから洒落にならねえよ。

「あんたの封霊術を私の心霊医術で解けないかやってるのよ。感謝されこそすれ迷惑がられる筋合いは無いわよ」

「そ、うか。それは、どうも……うおえ」

それはありがたいのだが、この吐き気だけはたまらん。せめて朝のうちに言ってくれば飯食わないで来たのに、蓮実に朝飯やつくんだった。

「お願いだから無理に話さないで……あんたが吐いたら、弾みで内臓引き千切るかもしれないから」

俺を見る上木の顔は引き攣っている。ふむ、洒落になってないのは向こうも一緒のようだ。やべえ、超不安。

「ありましたか？上木さん」

興味深々といった様子で目の前の光景を見る内村さん。あんたぶつちやけ、心霊医術が見たかっただけだろ。

「もう少し奥に何か、これかな？多分これが……っ！！」

内村さんの問いに答えかけたところで異常に気がついた上木は急いで俺の胸から腕を引き抜いたが、その後すぐに地面に崩れ落ちてしまった。

研修の一端そして（後書き）

一人称の視点で書いたため、ストーリーを補完するための話を人物の視点で書きたいと思っても中々出来ません。

今後、何らかの方法でストーリーを補完する為の小話を混ぜて行くつもりなのですが、その場合は視点を三人称で進めていきたいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5398y/>

袈い屋本舗

2011年12月2日17時50分発行